

# 「評価」を考える

## 評価の変遷

1. 絶対評価：教師の主観的な判断が入りやすい評価。  
↓
2. 相対評価：正規分布曲線に基づく成績配分を客観的とみなした。  
全体の中でどの程度の位置にあるかを示す評価。  
子どもの競争によって評価が決まる。  
評価が悪くなるのは、競争に負けたからであって、教師に責任はない。  
（成績が悪いのは、競争に負けたからである。）  
母集団のレベルによって、評価が変わる。  
学力実態を伴わない排他的な競争を激化する非教育的な評価。  
↓
3. 到達度評価：事前に目標値を設定し、そこへの到達度によって評価する。  
↓
4. 目標に準拠した評価：現在行われている評価  
客観的に存在する「教育目標」を評価規準とした評価。  
子どもが目標に到達しなければ、教師の教育活動が問われる。  
（成績が悪いのは、教師の教え方が悪い。）→成績のインフレ

## 評価観点と評価規準と評価基準

1. 評価観点
  - 子どもにつけたい力を短い用語で示したもの。
  - 「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」
2. 評価規準
  - 評価観点によって示された子どもにつけたい力を、より具体的な子どもの成長の姿として文章表記したもの。
  - 国立教育政策研究所が、具体的に指針を示している。
  - Ex.「異分母分数のたし算ができる」
3. 評価基準
  - 評価規準で示されたつけたい力の習得状況の程度を明示するための指標を数値化・記号化・文章化したもの。
  - 「判定基準」とか「判断基準」
  - 規準「異分母分数のたし算ができる」
    - 基準「ペーパーテストで何%の正解率かを決める。」
    - 量的な「基準づくり」
  - 思考や判断力といった高次の目標を量的に把握するのは無理。質的な「基準づくり」が必要。
    - 「ルーブリック（評価指針）」
      - ・学習課題に対する子どもたちの認識活動の質的な転換点に基準をあわせて段階を設定するとともに、その段階を代表する作品例などを提示するもの。
      - ・Ex.「実験」活動の評価
        - (3)「データに基づいて結論を導いており、その結論を証明する証拠もあげている。」
        - (2)「データに基づいて結論を導いているが、その結論を証明するものをあげていない。」
        - (1)「データに基づいていない結論を導いた。」
        - (0)「結論を導けない。」

- ・学習前に作成し、子どもに公開することによって、子どもにとって学習活動や自己評価の指針としての役割を持つ。

「今日は、集めた資料をどれくらい上手にまとめるかをみます。」

○主体的に学習に取り組む態度→ルーブリックがいいと思われる。

- ・懲罰的につけるのは、さけない。

## その他

### 1. 評価の妥当性

- 目的としている評価対象をどれほどよく評価しているのかを示す概念。
- 評価内容が評価対象を的確に代表しているのかを問う。

### 2. 評価の信頼性

- 評価のあり方が、評価しているものをどの程度一貫して評価しているのかを示す概念。
- いつどこで実施してもその評価の精度が一貫していること。

3. 指導したことについての評価でなくてはならない。指導していないことを評価してはいけない。いかなる評価も指導要録や通知表への記入だけの評価であってはならない。

4. 子供たちの成長のための資料として活用される評価であり、また、教師自身の指導の改善に役立つ評価でなくてはならない。

5. 子どもたちの「自己評価」「相互評価」も大切にしたい。しかし、教師は、それを評価できる目を持つことが必要である。

## 現場でどのようにすればいいのか。その1例と注意点

### 1. 知識・技能（教える内容）

- 量的に判断し、数値化できる。
- ペーパーテストで、あらかじめ通過率を決めておいて、評価する。
  - 80%・・・よくできる
  - 70%・・・できる
  - 70%以下・・・努力しよう
- ノート・宿題

### 2. 思考・判断・表現（考えさせる内容）

- ルーブリック的な評価をする。段階的な評価基準を事前に設定していくのは、むずかしい。
- ノートを集めて、3段階に分類して評価をする。
- できれば、事前に評価の観点を子どもたちに示す。
- 授業中の発言や発表をチェックしておく。→授業中は、むずかしい。授業後になってしまう。

### 3. 主体的に学習に取り組む態度

- 毎時間の評価は必要ない。
- ルーブリック的な評価であるが、「思考・判断・表現」が大きく関わる。
- 自らの学習を調整しながら学ぼうとしているかどうかという意志的な側面の評価。
- 関心・意欲・態度と大きく違う。

#### 4. 授業の中で

- ①何を評価するのか。
- ②いつ評価するのか。
- ③どのような方法で評価するのか。

をはっきり持って授業に臨みたい。

#### 5. 評価の「見える化」

- ノート・提出物・ワークシート等で評価する場合、必ず、どう評価しているか子供にわかるようにすることが大切である。百字の宿題、計算ドリルの宿題等も○をつけたり、間違いを訂正することも大切だろうが、きちんと評価を書いて、子どもたちに示してやることが、一番大切だと思う。
- ペーパーテストは、点数をかくのではっきりと評価の「見える化」ができるが、ペーパーテストのみの評価であってはならない。他の評価もペーパーテストと同様な「見える化」が必要である。

#### 6. 今まで通りの相対評価はさげたい。

- 「よくできる」を何人ぐらいにしようか？
- 「努力しよう」を何人ぐらいにしようか？
- だいたい的人数を学級で合わそう。
- あなたのクラスは、「よくできる」が多いのちがう？
- あなたのクラスやったら「努力しよう」がもっと多いはず。
- 「今回は、このテストで評価を出しましょう。」

こんな話が出るようではだめですね。

※参考文献：啓林館：CS研レポート Vol.51

## 私の評価の出し方

### 1. 毎時間評価する。(形成的評価)

- 評価のない授業はあり得ない。
- 知識・技能の評価  
ペーパーテスト・ノート
- 思考・判断・表現の評価  
ペーパーテストでは、ほとんど評価できない。  
ノート、ワークシート、提出物、発言、話し合いが、中心になる。  
一連の学習が終わるころの評価を中心に総括的評価に活用
- 主体的に取り組む態度  
ペーパーテストでは、ほとんど評価できない。  
ノート、ワークシート、提出物、発言、話し合いが、中心になる。  
一連の学習が終わるころの評価を中心に総括的評価に活用

### 2. 評価の「見える化」

- 子供にはどう評価されているかはっきり示す。
- 事前に評価の観点を子どもたちに知らせてやるのもよい。

### 3. 総括的評価は、普段の計形成的評価を加味して、学期末、学年末、指導要録の評価とする。